書評

James McMullen
Idealism, Protest, and The Tale of Genji: The Confucianism of Kumazawa Banzan (1619-91)
(Oxford University Press, 1999)

儒教的理想主義と『源氏物語』

平石直昭

一　内容の要約

熊沢蕃山は十七世紀の日本がうんだ最も重要な儒者の一人である。本書は蕃山の研究に半生を費やした著者が、長年の蘊蓄を傾けてその全体像を描き、その重要性の解明を試みた傑作である。徳川思想史、東アジア思想史、そして異なった文化伝統の交差に関心をもつすべての人にとって有益な研究書である。以下ではまず本書の編別構成に従って内容を要約し、その上で本書の主要な特徴について論じよう。

本書は五部一二章からなる。第一部「時代の光景」（1章）は、まず儒教と『源氏物語』に関する二つの逆説（後述参照）を示して、本書のモチーフを示した後、蕃山が生きた徳川初期の思想状況、徳川社会のあり方、儒教史の概略、武士権力と儒教の関係、徳川思想史の研究史などを論じる。第二部「ある武士の一生」（2章）は、主に伝記的資料と藩政記録等を基にして、蕃山が儒教的プロテストの典型であったことを示す。一六五七年に岡山藩から致仕するまでの蕃山の前半生と、それ以後、彼が諸処を転々としつつ、藩政や幕政に対して試みた政治的諫言が紹介される。藩主権力の専制化に向う池田光政と、地侍層を基盤として武士一般の平等と独立を重視する蕃山の違いが致仕の背後にあること、蕃山学のもつ主体的自律性の傾向が幕府権力の疑惑を招いたこと、公家との交際によって、前封建的な古代文化の世界にふれたことが現実批判の刃を鋭くしたことな

どが分析される。

第三部「世界観」（2章）は、蕃山の主要著述を分析して、彼の世界観の諸側面を明らかにする。文明や社会の起源、「道」の発展に関する蕃山の見方、彼の日本史像や同時代認識等の多岐にわたる論点を示す。また蕃山の人格形成（修己）論を分析し、陽明学から学んだ主体の道徳的自律性の重視、主体の自発性を可能にする「慎独」観、超越的な天の理念（p. 266）などの特徴を指摘する。ついで統治（治人）論との関連で、蕃山が質素な共同体的農村社会を理想とし、儒教の「大同」への復帰を可能としていたこと（p. 275）、しかし日本再興のためには日本歴史を知る必要があると考え、そのための経典として『源氏物語』を見出したという。こうして『源氏』研究は、宋明学による道徳的主体としての自己形成とともに、日本で儒道を実現するために不可欠の営みとされたという（p. 281）。

第四部『源氏物語』（5章）は、蕃山の『源氏外伝』の成立事情と内容分析、蕃山思想におけるその意味等をテーマとする。本書のなかで最も長く、著者が力を注いでいることが分かる。著者によれば、十七世紀後半の日本で進んでいる過程に対して蕃山は批判的だった。一般武士や庶民の犠牲の下で遂行される将軍や藩主権力の強化、貨幣経済の浸透、商人の台頭、都市化の進展、人口増大、森林減少、仏教の興隆等である。これらを批判する蕃山はその歴史的発端に、武家による権力の掌握と武力や法度による秩序の維持、すなわち礼楽という文化的装置による秩序維持の喪失を見いだした。そしてこの失われた古代の礼楽秩序を伝えているのが『源氏物語』だとした。かくて『源氏』は、蕃山が現実を批判する歴史的根拠になったという。

第四部の各章では、中院通茂との共同作業など『源氏』研究の経過、蕃山が儒教的立場から『源氏』を推賞するさいにぶつかった多くの困難と、それを打破するために彼がとった多層的な解釈の試み、『源氏』の描く世界のどんな点に蕃山が着眼していたか、どのような理想的な政治家像や女性像、人間像をもっていたかなどを分析する。さらに近年の研究成果を踏まえて『源氏』がもつ政治的次元を強調し、本居宣長から批判された蕃山の『源氏』解釈に実は根拠があったと主張する（p. 400）。著者によれば『源氏』における初期王朝時代への回顧には、相対的に特権のない下層貴族層による、専制的な藤原北家への抵抗が含意されており、蕃山が共鳴した光源氏等の人物描写にはそれが反映されているという。ここから著者は興味深い洞察をひきだす。孔子、紫式部、蕃山は、いずれもそれぞれの社会で辺境的な位置にあった社会層の出身であり、この共通性の上に蕃山は、孔子の道徳説、紫式部が描いた日本の失われた過去、そして自分の理想とする村落共同体像を結合して、一つの理想的秩序像を構築したというのである（p. 404）。

第五部『大学或問』（2章）は、最晩年の蕃山の著述『大学或問』を分析する。著者によれば武士の農村居住策などを含む

この上書は、理想社会の実現に向けて幕閣を説得するために対外危機（清による日本侵略の可能性）を利用した企てであった。そして従来具体的な政策論にはふみこまなかった蕃山がこれを書いたのには、聖賢より低い豪傑レベルを対象とした次善策の追求という面があったという（p. 417）。さらに著者は『源氏外伝』と『大学或問』の内容的連関に注意しつつ、蕃山にとっての英雄が、儒教的聖人、再生した源氏、過去の理想的武将（北条泰時ら）、そして蕃山自身の投影（p. 439）からなるという。最後に第一二章ではこれまでの分析を総括して、蕃山の最大の達成は、『源氏物語』のヒューマニズムと儒教的理想主義とに立って抵抗を貫いた日本における模範という点に求められると強調している（p. 480）。

二　本書の主な特徴と論点

以上が本書の大まかな要約である。私見によれば本書には、四つの大きな特徴ないし論点がある。第一に本書で著者は、蕃山の遺した著述や草稿類、関連する藩政資料や関係者の書簡、日記等を丹念に調査し、蕃山の生涯の事績を復元している。また著者はニュアンスに富む蕃山の原文を正確に理解し、その多義性に周到な注意を払いながら、複雑な蕃山思想の再構成を試みている。これらの作業がいかに大きな忍耐と努力を要したかは想像に難くない。心から称賛と敬意を表したい。蕃山に対する信頼できる専門書として、本書は疑いなく徳川思想史の理解に大きく資するであろう。

海外の学者による日本思想史の研究には、一次史料の調査や読解に関しては日本人学者の業績に多くを負いつつ、理論的な分析枠組みや視野の面で新しさを出そうとする傾向がある。一次史料の読解にともなう技術的・言語的困難を考えると、こうした接近法には理解できる面がある。しかし著者はそうした点での「甘え」を拒否し、日本人研究者と対等の立場に立って、史料の発掘・批判・評価という最も地味で目立たない基礎研究から出発して、他の追随を許さない達成を示している。そのことは本書の随処で著者が示す、多様な史料からの引用とその組合せの自在さから明らかである。本書に対するどんな書評も、この事実の前にまず頭を垂れるべきである。

第二に著者は、先にあげた二つの逆説と蕃山の地侍層出身という出自を結びつけて、説得力のある蕃山思想の全体像を示している。儒教は所与の支配秩序を前提し、それへの恭順を教えるイデオロギーとしてよく理解される。その点で現実を超える価値にコミットし、その実現をめざして現実と緊張関係にたつ理想主義や抵抗の立場とは相反するものと見なされやすい。しかし著者によれば、儒教は蕃山において理想主義的抵抗の立場と結合していた。また『源氏物語』は女性の手になる古代王朝時代の恋愛小説と見なされ、殆どの徳川儒者によって好色へと人を誘うものとして指弾された。しかし儒者である蕃山はこの

小説を高く評価して注釈書を著わした。これら二つの逆説はどう説明されるのか。

この問題に答えるために著者は、西欧思想史上の idealism 等の概念を理論的に検討して、儒教の分析枠組みとしてそれらが適用できることを論証する。そして中国古代に形成された儒教には、法家や兵家という当時の主流に対する反時代的な理想主義的抵抗の要素があり、それは宋明学で復活され、蕃山に継承されたという。さらに著者によれば、徳川初期の武士権力のエトスには法家や兵家との共通点が多く、それへの対決色を強めた蕃山は、京都の公家社会に残っていた古代日本の朝廷文化の伝統にそれを批判する規準を見出し、『源氏』をこの文化を伝える経典として捉えた。こうして蕃山において、地侍層を基盤とした幕藩政府の権威主義への抵抗を媒介として、儒教と『源氏』という東アジアのうんだ二つの文化伝統が結合したとされ、儒教、『源氏物語』、地侍層という三要素を核とした独自の蕃山像が形成されるのである。

ところで研究史上はじめて儒教的理想主義と地侍層出身という出自を結びつけて蕃山を論じたのは、尾藤正英である。彼は『日本封建思想史研究』（一九六一年）で、徳川時代前半期の儒者に、体制擁護者的立場と批判者的立場という二類型を見いだし、中江藤樹と蕃山を後者の代表として評価した。尾藤によれば、戦国日本の地侍層は宋代中国の官僚層や西欧中世の領主層と歴史社会的に対応関係にあり、宋代官僚のうんだ朱子学は西欧中世の自然法に対応する。蕃山らはそうした朱子学を日本に導入して幕藩制に対抗しようとしたが、地侍層という社会基盤が失われていったため挫折した（同書第五章、とくに二七二―七三頁）。すなわち幕藩政府の絶対主義化に対する封建的抵抗の立場を蕃山に見いだすわけである。

しかし尾藤は蕃山に理想社会論があったことを認めつつも、そうした社会の過去における実在や現代における再現可能性、その実現方法について蕃山は深く考えなかったとし、また蕃山の立場を「身分制の秩序をいわば合理化する」伝統合理主義とよんだ（二四三―四五頁）。これに対してマクマレンは、儒教的抵抗や地侍層への着眼という点では尾藤を継承しつつ、文明や社会の起源に関する蕃山の見方、彼の同時代観や歴史哲学、『源氏外伝』『大学或問』などを総合的に結びつけることにより、尾藤と異なった見方を出している。その骨子は次の三点にあるといえよう。①蕃山には歴史の初期における平等社会像があり、階統制や政治権威は偶然的なものと見られていた。こうした平等主義の点で蕃山はJ・ロックに類比されうる（pp. 184-90）。②晩年の蕃山は『源氏物語』に、武家支配以前の前封建的な王朝文化や政体が保存されているのを発見し、そこに武力に基づいた徳川支配を批判する基準を見いだした。③邵康節の歴史哲学をふまえた蕃山は、歴史が下降期に入っているとしてもなお午すぎに属し、日本再興の可能性があると考えていた（p. 440）、である。

一言でいえば著者は、尾藤が蕃山を「空想的」といって片付けた（二四三頁）所に蕃山の戦略戦術を見いだし、儒教的理想主義にたつ抵抗者として彼を捉え、その基礎に独自の『源氏物語』観を見いだしたのである。このように見てくれば、本書がIdealism, Protestと並んでthe Tale of Genjiをタイトルにあげている理由がよく理解できよう。『源氏外伝』がもつ蕃山思想における批判的な意味連関を発見することで、著者は新しい蕃山像を描くことに成功したといえる。

著者がH・オームスの『徳川イデオロギー』（1985）を批判するのも同じ理由からである。オームスは徳川初期の新儒教の目的が、徳川権力の歴史的性格を隠蔽することにあるとした（同著第三章参照）。しかし著者からみればこの見方は、蕃山のような儒教的抵抗者の存在を無視しており、多様性に富んだ徳川初期思想史や儒教的伝統自体の平板化に導くからである（pp. 9-10）。

第三に著者は、徳川儒学思想について「理」の重視と「気」の重視という二つの流れをわける阿部吉雄の見方（同著『日本朱子学と朝鮮』一九六五年、とくに五二〇―三四頁参照）を出発点としつつ、蕃山の徳川思想史上の意義について独自の見解を出している。それによれば、理の重視は形而上的・精神的なものの重視に導き、道徳や政治の絶対主義や非歴史的な過去観をうむ（藤樹、光政、山崎闇斎など）。これに対して気の重視は、人情の評価、歴史や自然認識への志向や現実の神格化にゆく（貝原益軒、古学派、宣長など）。そして気の絶対視（理の否定）は、荻生徂徠において理の絶対化と同じ帰結に達し、双方とも個人の道徳的主体性を否定し、潜在的に絶対主義的統治を正当化するという。

これに対して蕃山では、理・気の二つが創造的な緊張を保って併存し、気の重視から人情時変の多様性への関心がうまれる一方、理の重視から、超越的な新儒学の道徳説への帰依がうまれた。そしてこうした個人の道徳的自律性が、彼の理想とする委任された自治的社会秩序（devolved social order）の理念を支えた。かくして道徳、政治の両面で蕃山は絶対主義を免れたとされ、彼による朱子学の形而上学解釈は近代的世界観形成の上で創造的ではなかった代りに、個人の主体性への資格付与という点でそれは重要だったというのである（以上、pp. 181-84）。

ところでR・ベラーは丸山眞男の『日本政治思想史研究』（一九五二年）の英訳版（1974）への書評（*Journal of Japanese Studies* 3:1, 1977, pp. 177-83. のちにBellah, *Imagining Japan: The Japanese Tradition and Its Modern Interpretation*, 2003, pp. 140-46に再録）の末尾で、近代の危機はかくも深い以上、（丸山が指摘した）英雄的な初期近代の移行契機を無視しないとともに、別の合理的な選択肢を探求する上で先験的に放棄してよいものは過去には何もないはずだという趣旨を書いている。著者は本書冒頭でこの一節を引き、自著はこのアピールへの応答であり「蕃山の生活と

思想に丸山の近代性を超える価値構造を見いだす」と述べている（pp. 7-8）。丸山が問題としたのは、仁斎学や徂徠学における、朱子学的な連続的思惟（天人相関）の解体という存在論レベルでの近代化であった。これに対してマクマレンは丸山の議論を承認しつつ、それとは異なる社会的・認識的レベルの自律性を蕃山に見いだして評価するわけである。

第四に以上と関連して、著者は蕃山思想をたんに徳川思想史の文脈だけでなく、東アジア思想史、さらには西洋思想史との比較をも視野に入れて捉えている。私見によれば本書で著者は、東アジア思想史を貫く基本的な対抗関係として、道教的神秘主義と結びついた儒教的理想主義対法家的兵家的権威主義という対立を見ている。そして前者の復活である宋明学は、超越的な価値観、自律的な主体の意識や道徳的な責任意識、そうした意識を支える良心の持ち主として人間は平等だという観念などを弱いながらも持っており、蕃山はそれを継承したと考えるのである。こうした見地は上述した尾藤の見方や朱子学に関するTh. de Baryらの見方を継承しつつ、一層精緻化したものといえよう。

この見地から著者は、普遍的理念に賭けて幕藩政府に抵抗した蕃山は、F・ウェイクマンが王夫之を引いていうような、中国読書人官僚のなかの倫理的理想主義タイプ（西洋思想史の異端に近いとされる）に対応すると述べ、さらにはロックのような西洋思想家との比較も試みる。著者によれば、ヨーロッパにおける法曹身分と裁判制度の存在等は儒教との大きな違いをなし、また日本における社会の軍事化や封建構造の持続、独立したブルジョア層の非在、宗教の違いなどのために「自己」の構造が日・欧では全然違う。その意味で蕃山は西洋的意味でのリベラルとはいえない。にもかかわらず彼が西洋の自由思想家と分有する方向性は、彼を恣意的な絶対主義に抵抗した仲間に入れるというのである（pp. 468-71）。

以上にあげた四点のうち、評者は第三、第四点に関しては意見を留保する。儒教に理想主義的抵抗の要素を見いだすこと、また宋明学に一定の道徳的自律性の観念があり、蕃山がそれを継承したとする点には異論がない。しかしそれがどんな意味で丸山のいう近代性を超える価値といえるのかには疑問が残る。徂徠学における天人相関の否定を経ることのない蕃山の「主体」は、どこまで主体的といえるだろうか。例えば紙幅の都合でここでは詳説できないが、蕃山には中江藤樹を継承した「造命」説があり（例えばp. 397に引かれた一文は藤樹をうけている）、それは「禍福」という功利的価値と「善悪」という道徳的価値が彼において連続していたこと、したがって「禍福」をもたらす天命が人間に対して必ずしも超越的ではなかったことを意味している。[1] そうした「主体」はどこまで道徳的に自律的といえるだろうか。また著者は、蕃山の描く人類の初期社会が差別な

き農村共同体だったとし、そこから蕃山の理想社会をarcadiaとして描きだす。しかし初期社会に権威がなかったと蕃山が見ていたとしても、そのことは直ちに蕃山が階統制や支配等の正統性を相対的と考えていたことを意味しないであろう。事実、彼はくり返し、三綱五常が歴史を超えた天理だと強調している。この点で著者の議論は、事実問題（quaestio facti）と権利問題（quaestio juris）とを混同してはいないだろうか。歴史上の存在の有無という問題と、秩序や支配の正当性根拠の問題とは、レベルが違うということである。

他方で評者は、蕃山が示した文化秩序の再建計画に関する著者の指摘は非常に重要と考える。それによれば、朝廷が伝える古代の礼楽は京都の学校で公家の子弟に教育され、彼らを通して武士層や地方にも広められ、ここに江戸を中心とした政治的軍事的秩序と京都を中心とした文化的影響のネットワークが共存し、後者は世の風俗を化する力をもつとされた。こうして日本を文明化する朝廷の使命が制度化され、公家は高位の武家と並んで対等に国家的意味を持つとされたというのである（p. 438）。評者はここに示された文化を代表する京都と政治を代表する江戸という二元的な蕃山の見方に、仁斎学における道徳と政治の二元関係に対応する構造を見いだす。[2] それは十七世紀の徳川思想史を構造的に理解する上で、有益な視座を提供するものといえよう。

注

（1）徳川初期思想における天と運命の関係について、詳細は拙稿「徳川思想史における天と鬼神――前半期儒学を中心に」『アジアから考える［7］世界像の形成』、溝口雄三他編、東京大学出版会、一九九四年を参照。中江藤樹については二六五―六七頁。

（2）相良亨『近世日本における儒教運動の系譜』一一一―一四頁、弘文堂、一九五五年、及び拙著『改訂版 日本政治思想史――近世を中心に』六二―六五頁、放送大学教育振興会、二〇〇一年参照。

付記　本稿は上智大学刊の *Monumenta Nipponica* に掲載された書評論文“Confucian Idealism and The Tale of Genji”の日本語版である（59:2, pp. 245-55, Summer 2004. 英訳はケイト・ナカイ教授による）。日本人読者には日本文の方が読みやすいという希望があり、『日本思想史学』にも載せて頂くことになった。事情を諒とされた両誌の編集部に感謝したい。なお原著からの引用その他で日英両版の間に多少の出入がある。

（東京大学教授）